

ウィリアム・ワーズワスの 『グラスミアの我が家』 抜粋翻訳¹

水 野 薫

Abstract

This is an attempt at translating *Home at Grasmere* (1800), composed by William Wordsworth (1770-1850). These lines were conceived as the cornerstone of *The Recluse*, which was to express the poet's philosophical stand on man's growth and completion. Unfortunately, *The Recluse* was not completed during the poet's life, but *Home at Grasmere* allows us to infer what prevented him from achieving his philosophical vision of poetry.

It was Coleridge that urged the poet to write *The Recluse*. Coleridge was keen to encourage Wordsworth to write *The Recluse* in order to redeem the English spirit, which had been weakened in the despair caused by the French Revolution. Meanwhile, while he was lingering over *The Recluse*, Wordsworth composed *Home at Grasmere*, a private utterance serving as a preliminary to a more public avowal. These private lines tell us what the poet's prime interest was in 1800 and how it differed from what Coleridge had in mind about *The Recluse*.

In 1800 Wordsworth ceased looking away from the delusion and despair of this world and embarked on revealing human nature as it is. Though in 1798 the poet was still keen to improve society, in 1800 he noticed that painting human nature in all its reality was the most important way to promote the spirit after the scars of the Revolution. He was convinced that by illuminating the dark patches he could better evoke, in the reader's mind, an image of a more perfect life reflected in the light of the "one sensation" in Grasmere. By 1800 his poetry was no longer an instruction but a confession.

解題

1800年の1月から3月の間に書かれたとされる、ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の『グラスミアの我が家』(*Home at Grasmere*) は、哲学詩『隠遁者』(*The Recluse*)への礎石として綴られた詩である (Jonathan Wordsworth *Prelude* xiii)。結局完成を見なかった『隠遁者』であるが、1800年の詩人の心理を理解する上で重要な作品である。

『隠遁者』の執筆計画は、当初、詩人の朋友であるコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) からの強い要望であった。フランス革命以後墮落した国民の魂を鼓舞するための哲学詩を書いて欲しいというのがコールリッジから詩人に託された願いであった: “I wish you would write a poem … addressed to those, who, in consequence of the complete failure of the French Revolution, have thrown up all hopes of the amelioration of mankind …” (Darlington 5)。最初、コールリッジの詩人への信頼の熱さが詩人を駆り立てはしたが (Darlington 4)、その勢いは長くは続かなかったようである (Darlington 5)。

その裏で、コールリッジの説得を掻い潜るように、そっと書き進められていたのが、『グラスミアの我が家』であった。『隠遁者』へ続くはずの暁光の詩行ではあったが、コールリッジが望むような哲学詩の構想からは離れて、見栄を張らない詩人の素顔が書き留められたものである (Darlington 8)。ジョナサン・ワーズワスは、この時期の詩が詩人の理想と大志を最も顕著に示しているとするが (Jonathan Wordsworth, *Borders* 108)、この時蘇った詩的高揚は、社会の矛盾を調停する哲学詩にまでは至らなかった。その原因の一端を同詩自体が語っているように思われる。

同詩は、確かにグラスミアへの賛美、感謝、希望で埋め尽くされているように見えるが、熟読すると、かなり重苦しい表現も見受けられる。「最も深い地獄の暗黒の奈落の底」(984-5)を覚悟し、「恐怖」と「畏怖」(987)を

凝視する。都会の品位の無い貪りへの閉塞についても、1799年11月には、自分にはそぐわない主題であると目を背けていた（*The Prelude* I, ll. 5-25）彼が、1800年になって、『グラスミアの我が家』の中では、もう一度向き合う強さを明示する（ll. 1015-25）。この変化は、やがて、叙情民謡集の第1巻と第2巻の色調の差となって現れ、第2巻の『兄弟』（*The Brothers*）のレナルドや『マイケル』（*Michael*）のルークが、田舎という楽園から出て厳しい現実の社会で（少なくとも一時）さ迷う青年たちとして描かれることになる。

第2巻出版の数カ月前に書かれている『グラスミアの我が家』は、都会ではなく詩人にとっての歓喜の園であるにも関わらず、その楽園に駆り立てられて詩人が描く羊飼いは無分別で（ll.407-38）、『序曲』第8巻で描かれるような、詩人が幼少期に啓蒙された羊飼いの心象とはおよそかけ離れている。詩人の冷徹な目で描写された『グラスミアの我が家』の村人には、人の心の脆さへの詩人の意識の変化の兆しが伺える。厳しい現実社会に翻弄される魂の脆さを語りつくすことこそ、高い知性と意識を育てるのだと会得した彼は、1800年の春、また一步前進した詩人になっていた。ワーズワスの甘美な詩の熱情は、「フランス革命で痛手を受けて、人類向上への希望を捨ててしまった国民」に聞かせる哲学ではなく、後の世代に向けて人生の機微をつぶさに回顧し、人と人の繋がりや自然と人間の交感を再吟味するための自認の書に傾けられるようになっていった。そして、ミルトンに倣ってギリシャ神ウラニアに呼びかける箇所を見ると（l. 974）、自身の書が叙事詩に近づく予感も、この時、詩人の心中に既にあったかもしれない。

ワーズワスにとって極めて重要な時期に書かれた『グラスミアの我が家』は多くの解釈を許すであろうが、訳者自身にとってその再考の一助になればと願い、拙訳を試みた次第である。

『グラスミアの我が家』抜粋翻訳

かつて 向こうの丘の頂で 立ち止まったことがある
まだ小学校の生徒で（いくつだったか思い出せないが
過ぎ去った今も、そのときのことは、はっきりと覚えている）
この閑散とした光景を目の当たりにして
突如 心の中に流れ来るものに打ちのめされた
私は 急いでいることも忘れた
年端のいかない私は 何かに急いでいたのだが
「ここで暮らせたらどんなに幸せだろう
もし死というものを思うなら
—この楽園を眼前にして 死への想いなど あり得ないが—
ここで命を終える人はなんと幸福だろう」とため息をついた (10)
私は 預言者ではなかった
ここに住もうとか それを望むことすら思いもよらなかったが
鮮やかな歓喜が走った
ここでの生死の営みが一瞬心をよぎった
それが自分のものになるとは露知らず
見渡す限り 柔らかい緑の丘だった
目眩がするというほどではないが 空中に高く浮かんでいて
下には広がる谷間の深み 上には立ちはだかる丘
長く そこに立ち尽くしていた
まるで、そうして立ち尽くしていることこそが、
その日の務め その日の用向きであったかのように (20)
快樂をもとめる本性がこれ以上望めないほどに
体を休めるには絶好の場所
でも 精神を煽りたてる この光景を見て
動かされない心などあろうか

思いを馳せた 風に行きかう雲に あるいは喜び勇むそよ風に
そのそよ風は楽しそうに水面ではじけ
草むらや麦畑の流れるような深みを抜けて
互いに絡み合い絶え間なく波打つ (30)

太陽の光 織り成す影 蝶々 そして鳥たち
天使や羽を携えた精霊すべてが
何に制約も受けることもなく
目にするもの総ての主であった
私は 座して 心躍らせ 見渡した
まるで そんな自由が 我がものであるように
その力 その喜びが 我がものであるように
ただ 野辺から岩へ 岩から野辺へ 軽やかに行き交うことだけに
あるいは 湖の岸辺から中島までそして中島から岸辺へ
開けた場所から木陰成す場所へ

一面に広がる花畑から 木々の茂みへと (40)
高さから低きへ 低きから高きへ しかもなお
この広大なくぼみの内部で 飛翔することだけに駆り立てられて
この地こそが我が家、この谷間こそ 私の魂の棲家
このとき以来 この場所は まるで
今 この瞬間に 実際に目にしている光景であるかのように
思い出の中で 常に美しく映えた
私の魂が しばしば 喜び訪れる場所
喜びにあるときには それに 一層の輝きをそえ
悲しみにあっては (もっともそれをまだよく知らないが)
少なくとも 物憂げが心のきらめきを塞ぐとき (50)
私に一縷の光をくれる場所となった
そして 今 この場所は 終生私のもの

いとしき谷間 汝の楚々とした佇まいの一郭が 私の棲家である
… (略)

だから 私が手にした住処への思いに高揚して
情熱的に語ってもかまわないではないか
私の無形の財産 有形の財産について (90)

私の所有するもの すでに得たもの これから得るであろうもの
否 これから得るに違いないもの
私がこれまで培ってきた信念が まともで正しく認識されている限り
つまり 幼き頃に比べて

少しは何かを失ったことがあるとしても
今前より自然と一体でありこれから益々そうであると信じて止まない
証にこの谷間をごらん そこにたたずむあずまやを
私のエマ²が私とともに住まうあずまや

心よ この暮らしに心を留めよ 鼓動をとめて
立ち止まれ 呼吸するからだを呼吸させないで (100)
ただ あるがままにあれ

ああ この静寂こそが 神授物に対する神への感謝
そうでないなら ほかにどこに神への感謝の宮などあり得ようか
今 私のものとなり この愛しき棲家を私と共に分かち彼女の面影は
必ず 私のそばに あるいはそう遠くないところにあった

私の目が何か愛しいものに注がれる時に
あるいは 私が幸せの真っ只中で喜びに浸る時に
私の赴くところは どこでも彼女の声が
どこかに隠れ轉る小鳥のように歌いかけて来た (110)

彼女を思うことこそは 一縷の光
あるいは 見えない心の交わり
風にもたじろがない 気配あるいは芳香

どこに行くときでも　そこはかたなく思い巡らす思いの中で
彼女を思うことが至上の喜び　何にも増して
だから　人間誕生以来　何者も
私ほど豊かに感謝を述べる理由を持つ者がいようか
詩の調べと力で　更に感謝の念が高揚するなら
詩の力を借りて　詩を持って
喜びをさらに高らかと奏でようではないか (120)

この恩恵は　絶対的なものであり
何もののをも凌ぐ恵みを　与えられている
この上なく幸福なエデンの木陰でさえ
この恵みは得られず　得ることなどもとより不可能なこと
恋焦がれられてきた　良きものが今や我がものに
太古からの想いが満たされ　切なる心象を現実にし
その心象を　想像を超えるほど十分に　否　十二分に
私を抱きたまえ　汝　丘の連なり
私を汝の懷へ　しかと抱きたまえ
きょう　この晴れ渡った日に　汝の護りの手を思うのだ (130)

私は　その護りを　心に宿す
これこそ　闇から私をかくまう　莊嚴な隠れ家
でもなお　鮮やかで　なお穏やか
柔らかで　そして　陽気で　美しいあなた
愛しき谷間よ　汝の面（おもて）に湛える笑みは
静かに　しかも歓喜に溢れている
岩場や　樹木が繁茂する絶壁　そしてグラスミアとともに満ち足りて
湖中にある緑の中島　曲がりくねった岸辺
連なり岩をなす丘の数々
山の石材でつくられた教会とあずまや (140)

星屑のように連なって ぽつぽつと あるいは一軒ぽつと
木陰の引込んだところに ぼんやりと潜んで
あるいは 陽気な面持ちで 互いにきらめき合い
雲の間に 散らばる星のように散在している
これ以上 何を望めというのか とこしえの流れに満たされ
陽だまりの木々 陽の当たる丘の連なり 新鮮な緑の野辺
野辺にも劣らぬ山の緑 羊の群れ 牛の群がり
多くの鳴き鳥が憩う藪

毅然とした鳥たちのさえずり

朝から夕に 時おり思わぬ響きでもって

(150)

谷間の下を歩む人間に空の孤独と静寂を教える

私たちは この谷間の持ち主

大地の隅々に 同様の佇まいはあろうとも

他のどこで 見つかるというのか

他のどこにも (それとも これはただの幻想だと言うのか)

見つかりはしない

唯一の感覚が ここにある そうここに

幼少期に私の心に流れ来た あの一筋の感覚

昼も夜も ここに留まる ここだけに

あるいは 選ばれし人の心の中に留まって その心が

ここからどこへ行こうとも 消える事無く

(160)

この感覚は (名づけることはできずとも) 壮麗 美 静寂

大地と空が溶け合った 森巖である

このとおきおきの場所 多くの村人が集う 儚しい佇まいを

終の棲家 沈思の地にする感覚

どこから来ようとも思想の核となり

依存も欠損も無い完全な和合

自身でなりたち 自身で寿ぎ
無比の充足 この上ない合体 (170)

… (略)

しかし 春の扉は開け放たれた
粗野な冬は 春が 今日一日
あるいは しばらく続く陽気な日々の間
冬の訪問客を歓待し
彼等に幸せを運ぶことを許したのだ (280)

彼等は 中でも 雪解けの川の流れの上を
足繁く通う 鳥たちは一層
その優しい呼びかけに 喜び勇んでいる
未だ 冬に閉ざされてはいるものの
今日 微かな春の訪れに 歓喜の声を上げるのだ
長い間うらぶれて あるいはそのように見えた彼等が
彼等が喜びを一杯に見せているのに
私が同じように喜ばないでいられようか
この上ない幸せに満たされた私にも しかし
彼らのように 空を我が物にすることはできない
鳥のように無我の衝動に駆られて飛翔し
絶対支配の大群の一員として 飛び交うことはできない
その姿と動きは 壮大な調和であり 飛翔の舞踏 (290)
彼らを見よ どんな風に 輪を描いて進み行き
なお弧を描きて 飛び行くか
グラスミアの上を 彼ら自身が選んだ場所を
湖面を取り囲んで 天真爛漫に繰り返す飛翔
何度も曲線や弧を描いて 高く低く
後ろへ前へ 方向はさまざまに

まるで 鳥たちの中にひとつの魂があって
飽くなき飛翔を 支配しているかのように (300)
もう 彼等は 飛び去ったのかと何度も思ったが
でも 見よ 一群は再び巡り着て舞い上がってゆく
いまいちど 耳を傾けよ 羽音の響きに
微かに そう はじめは微かに
そして瞬間 聞こえてくる無心に羽ばたく音
そして また 前のように消えていくではないか
太陽に 自分たちの羽と 戯れよと誘いかけ
水に そして 光る氷に
何か美しい心象を見せてと誘いかける
鳥たちこそ まさに美しい心象そのものなのだ (310)
きらめく湖面に映えて下降するにつれて
なお柔らかく なお優美に化する彼等の姿は
湖面に止まるかに見えて 再び閃光の如くに上りゆく
まるで 憩いの場と休息をあざ笑うかのように
冬に訪れた束の間の春よ 今日一日は汝のもの さあ祝いたまえ
この太陽の光とうららかな空気は
これからを展望する期待でもって 私を祝福する
私にのみ付与されているのではなく
ああ 今日ここに集う冬の鳥たち皆が汝のうららに酔いしれている
甘やかな春 汝の足音を聞きつけて来る汝の馴染みの客
若葉の中で 陽気に愛を賛美する
あの幸福な春の鳥の群れではなくて (320)
でも いなくなってしまったのだ あの二羽 孤独な乳白色の番い
白鳥たち ああ 何故いなくなってしまったのか
こともあろうに ああ 彼らが消えてしまうなんて

今日の喜びを私と分かち合うはずの汝らよ 遠くから
やってきた同士たち まるでエマと私のように ここに
平安と孤独のうちに ともに暮らすために あなたがたもまた
この谷間を 全世界として選んだのだ
来る日も来る日も彼らを目にした
この容赦の無い嵐の二ヶ月間

(330)

彼らはそれでも湖の中央にいて よく私たちの目を引いたものだ
そこが彼らの安息の地だったのだ 私たちは互いに馴染みで
おそらく 谷間中が彼らの馴染みだったろう でも 私たちには
彼らの存在は 想像され得る以上に 愛しいものだったのだ
その優美さや静寂さゆえのみならず
その穏やかなる生 あるいは離れがたいまでの
変わる事のない 夫婦愛のためのみならず
彼らのあり様が あまりにも私たちに似通っていたから
彼らも 同じように ここを棲家と選んだのだから
彼らは新参者 そしてそれは我々とて同じこと
彼らも一対ならば

(340)

我々も 同じく 孤独な一対なのだ
だから 行かないで欲しかった 来る日も来る日も
彼らを どこかにいないかと探したが見当たらず
飛翔する姿もなければ 凍らない青い水面の
小さな見晴らしのよい場所に 寄り添う姿もなかった
よくそこで連れ添って 静寂の中じっと時を過ごしていたのだが
仲間よ 同胞よ 生涯を捧げた友よ
彼らに出会える日は 再びめぐり来るのだろうか
生き延びて 彼らは我々のために 我々は彼らのために
どちらも欠けることなく生きのびて

いや ひょっとして そんなことを望むには
もう遅いかもしれない (350)

報奨金に目の眩んだ 羊飼いが 死の鉄砲を用いて
一羽を亡き者にしてしまったかも知れぬ
家庭に待つ 彼の愛する家族のためにとて
そして 山の頂に暮らす 大切な羊のためにとて
そんなことはしないで欲しかった
もしかしたら 諸共やられたろうか
そのほうが 二羽のためにはせめてもの慈悲³

… (略)

あの物々しい声
そう言えば 散歩のとき しばしば聞こえるあの声
山手からか あるいは奥まった野辺からか
叫び声が木霊するのだ 繰り返される大声が (410)
あれは 喜び響き渡る 鳥の音のように
それとも 閑散とした木立を駆ける一匹の猟犬の遠吠えにも似て
あれは人間の声 迫り来る闇の中で
何と 恐ろしく響くことか 空は暗く 大地はまだ少し明るんで
照らされてこそいないが 雪に反射して
辺りが見える 風の音の間を縫って
羊飼いの呼び笛に応え 餌を求めて鳴く多くの羊の鳴き声に紛れて
あの声だ そう 紛れも無く

風にも似た おぞましい響き (420)

この山辺で かつて聞いたことも無いような声
あれは 羊飼いの声がここに響いて来ているのか
人の品位、人の神聖を汚す声が
下卑たふざけ 冒涇 怒りと化して はっきりと聞こえてくる

大酒のみが 分別の無い口論を繰り広げているのか
丘に囲まれて生まれ そこで成長した私は
自分の希望の鑑を求めて ここへやって来たわけではない (430)
善に喜ぶからとて
悪にあるいは抑制の効かない心の痛みに怯むことなく
私は 人間そのものを求めているのだ
共に暮らす あるがままの人間として
他のどこに暮らす誰とも同様に
その利己も 妬みも 雪辱も
よそよそしい近所づきあいも その哀れなあり様を
おべっか 不誠実 口論 不正までも含めて
… (略)

否 我々は孤立してはいない エマ
今 間違っって置かれ 人里はなれて
他の人は愛したことの無いものを
我々だけが愛しているのではない
この美しい谷間と広々とした高みに
ひらけた野辺と岩場一面に (650)
感情の恵みに不慣れなもののために
空しい愛情を注いでいるのではない
たった何週間か前はしょんぼり孤立して
また私たち亡き後はまたそうになってしまうような物に
今だけ愛を注いでいるのではない
我々だけが灯 (ともしび) を育んでいるわけでもなく
我々だけが輝けども移ろい行く炎を守り培っているわけでもない
しだいにしだいに消えてゆく炎を
どこを見てもそこに過去の誰かが

我々以前にも思いを馳せてきた (660)

どの木も散在して そのどれをとっても
誰かの心の糧になってきたし
或いは今も誰かの心の友のような存在かもしれない
この谷間は悲喜こもごも
がさつな羊飼いの棲家なれど
見渡す限り感覚がここに豊かに満ち満ちているのだ
日の光 影 微風 香り 響きと共に
… (略)

人について 自然について 人の生涯について
ひとり考えながら 時おり甘美な熱に誘われるのだ (960)

まるで音楽を聴くように自分の魂と交感しながら
だから できうる限り その甘美な熱を
数えつくせない詩歌にして託そうと思うのだ
真実について 崇高について 美について
愛について そして希望について
希望とは 現世の希望と死後の希望のことだが
それから 美德について 知的な力について
悲観にくれた時の恵み深い慰めについて
庶民（人間）に広く流布する喜びについて
個々の心が自身の穢れなき領域を保っていながらも
永遠と繋がっていることについても (970)

即ち それらがひとつの
大いなる命であることを私は歌いたいのだ
ふさわしい聴衆がたとえわずかであったとしても
たとえわずかであったとしても
かくの如く 最も聖なる詩人は祈った⁴

ウラニア⁵よ 貴方の導きが必要なのです
あるいは より偉大なムーサ⁶の神よ
神がこの地に臨在され あるいは天の高みにおられるなら
どうか私に導きの手を
何故なら 私は 影成す地を歩まねばならず
深みに沈みつつ 高みに上りつつ
天上の中の天が一枚の帳の奥にある幾重もの天球の中で
万物を受けとめなければならないのです
力の全て 畏怖の全て
それが単独であれ群集であれ (980)
常に人の形をとおして示されたのです
一雷のエホバ⁷ 高らかにうたう天使 玉座—
その傍を わたしは怖れずに進むのです
最も深い地獄の暗黒の奈落の底 混沌 夜
夢の力を借りて現れる如何なる盲目の空虚も
心の中 人間の心の中を覗く時にしばしば経験する
あの恐怖と畏怖を生み出しはしない
その心こそが私の在り処 私の詩の主たる領域である (990)
緑の大地を棲家とする美は
靈妙な精神である人間が大地の恵みから引き出す
もっとも美しい理想の形をなおも超越して
我が歩みに随行し 我が行く手に幕屋を張り巡らす
その美こそ絶え間ない隣人
楽園 そして至福の木立よ 恵みに満ちたな島々よ
深い海原にたたずむ太古からの大地にも似て
心が一度 愛によってその外観と強く結ばれ (1000)
その中に過去から永劫までの日々の繋がりを見てとる時

この粋組みが ひとつの歴史
ただの夢で終わることなど有り得ようか
祝福の時が訪れるずっと前から
私は 独りこの極致の和合を詩にしたいものだ
我々が何ものなのか それだけを詩にすると約束して
如何に見事に 各々の心が
（或いは 全人類の進歩の能力がそれと同様に）
外界と符号しているか
また どれほど絶妙に
（このテーマは 実際あまり耳慣れないが） (1010)
外界は人の心と合致しているかについて
そして 被造物は（それより低い名で呼びようが無いが）
人の心と外界が力を合わせて成就させるのだ
これこそが 私の大きい主張である
もし 私がしばしば他所に目を向けて
どこか他の場所で群集や仲間の中を流浪し
お互いの憤怒から生じる貪欲な熱に犯された光景を
見なければならないとしても
また 野辺や木立に漏れる
人間の孤独な苦悩を耳にすると (1020)
或いは 都会の壁に永遠に閉ざされて
陰惨な悲しみの嵐に悶え 立ち往生したとしても
それらが偽りの無い真実の声であらんことを
そうすれば 聞いて心乱れ閉ざされることなどないのだが
さあ 来たまえ 予言の詩の精よ 人間の魂よ
汝は広い大地に根ざした 魂の真髄
その魂は 偉大な詩人たちの心中に 大司教区の神殿を構える

汝の導きを我に与えたまえ (1030)

見極める知恵を うわべの物から本来のものを選び取る力を
うつつうものの中に眠る変わらぬものを教えたまえ
私の詩が存続できるように
その詩が天に垂れる光のように輝いて
来たるべき時に 人類を鼓舞する力となるように
その導きに より低められた人間の営みを織り交ぜて書くということ
一熟考された事物を書くと同時に

熟考する心と人間を書くこと

これらを見た傍き者が 誰であり何者であったかを

即ち 私がいつどこでどんな風に生きたか

その喜び 悲しみ 希望 恐れ (1040)

些細な人生の真実までつぶさに書くこと一

この労苦は 決して無駄ではあり得ない

この主題が 最も高貴なものと共存してなおふさわしいものならば

偉大なる神よ 生命と存在の源

道であり導き手 力と知力である神よ

どうか 私の人生を より良き時代の

より賢明で素朴な生き方の写し絵とさせてください

真の自由の中で 私の心を生かしめてください

どうか 全ての清らかな想いが 常に私と共にあって

この世の果てまで私を支えてくださらんことを

註

- 1 この抜粋は、Gill, Stephen, and Duncan Wu, eds. *William Wordsworth: Selected Poetry*. New York: OUP, 1998. の pp.90-99に収録された詩集に基づく。
- 2 「エマ」とは、ワーズワスの妹ドロシー (Dorothy Wordsworth, 1771-1855)

- のこと。
- 3 Woof, Pamela, ed. *Dorothy Wordsworth: The Grasmere Journal*. Oxford; New York: OUP, 1991, p.174. 当時、白鳥の卵を盗むことは重罪とされていたが、食用に白鳥を銃殺することは許されていた。
 - 4 ll. 973から ll. 990はミルトンの『失樂園』7章冒頭のインヴォケイション ll. 1-39. の影響下で書かれた詩行である。従って、ここで「最も聖なる詩人」とはミルトンを指す。
 - 5 6 7 「ウラニア」とはギリシャ神話に出てくる天文学を司る詩神のひとり。「ムーサ」とは、ギリシャ神話の詩神たちの総称。「エホバ」は旧約聖書の神。ワーズワスは、ここでミルトンの『失樂園』に倣って、ギリシャ神話の神々と旧約の神を共に登場させ、ルネサンス文学のひとつの特徴を踏襲する。

Works Cited

- Darlington, Beth. Ed. *Home at Grasmere: Part First, Book First, of The Recluse by William Wordsworth*. Ithaca; New York: Cornell UP, 1997.
- Gill, Stephen, and Duncan Wu, eds. *William Wordsworth: Selected Poetry*. New York: OUP, 1998.
- Woof, Pamela, ed. *Dorothy Wordsworth: The Grasmere Journal*. Oxford; New York: OUP, 1991.
- Wordsworth, Jonathan. *William Wordsworth; The Borders of Vision*. Oxford: Clarendon Press, 1988.
- Wordsworth, Jonathan. Ed. *The Prelude: The Four Texts*. By William Wordsworth. London et al: Penguin Group, 1995.